江戸小悪党記

小夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
江戸小悪党記

【Ｎコード】
Ｎ０８３２Ｚ

【作者名】
小夏

【あらすじ】
何の切欠か、江戸時代のような場所に来てしまった藤原鈴。
それを拾ったのは、小悪党の狐面の男。
がめつい養い親を得て、今日も今日とて金を稼ぐ鈴の人生転落記？

終章（前書き）

完結するように、頑張りますのでよろしくお願いします。

終章

藤原鈴は、ひどい有様の自らの周りを見て、それから差し出されたその手をじぃっと見つめた。
ひどく緩慢な動きでその手を握る。

それから一気に、すがりついくた。まるで、もう一度その手を離せば二度と救いが現れないとでも思っているよな必死さだった。

すがりつかれたとうの男は、いつもとは違う鈴の力の強さに少々困惑していた。
まさかこんなことで、こんな風にやつれるとは思っても見なかったのだ。

いつもはこのくらいでは萎れたりはしない。だからこそ、自分の手の内から少し離れたところにおいていたというのに。

どうやらようやく男の信頼が、鈴には『自分が捨てられる』という事のようにしか見えなかったらしいことに気づいたのだ。

幼子のようにすがりつく鈴を見て、男は気づかれないようにため息をついた。

震えながら手を必死に握りこんで離さない鈴を見ていると、無くしたと思っていた罪悪感という、得体の知れない感情が浮かび上がってくる気がして、男には不愉快だった。

しょうがないというように、つけていた狐の面を取って、無理やりにでも鈴に微笑みかけてやる。

すると、安心したかのように鈴は、必死にすがっていた手を離した。しかし、そのまま力が抜けたのか、ずるずるとその場に座り込んでしまう。

男にとっては迷惑なことこの上ないが、今度は鈴は着物の裾をつかんで離さない。

腰が抜けた、という表現をしてもいいだろうその様子を見ていた男は、今度こそわざわざ鈴に聞こえるようにため息をついた。

「このまま、この場にいてぇならどうぞ、あっしは帰らしてもらいやす」

「っ」

『甘えるな』と言うように、狐面の男に睨みつけられ、その言葉に息を呑んだ鈴はすぐさま体制を整えると、男の背後にぴったりと寄り添うように立ち上がった。

男はわずかに振り返りそれを確認すると、狐の面を着物の袖に仕舞い、何事も無かったかのように歩き始める。

男は少しも後ろのことを気にかけずに、鈴より遥かに早く先に行ってしまう。
その少し後ろを、ちょこちょこと犬のように従順に、鈴は翔けて行く。

男の後ろ姿を追いかけながら鈴は思う。

絶対にもう二度と離れるものかと。

もともと、この男がいなければ鈴はここで生きてはいけないのだ。
今なら分る、最初のあの時、あの迷いの森を抜けたあの時、確かに自分はこの男の下に居ることを選んだのだと。

だから、鈴は絶対に離れてはならないのだと決意したのだ。

だが

その決意も新たに、鈴が慣れない山道で転ぶまで後少々。

その後、狐面の男が立ち止まり鈴に手を差し出すまで後少しばかり。

男と少女が歩むは夜の街道、未だ魑魅魍魎が跋扈するその時代のこと。

そして、男と少女が去ったのは、未だ赤が乾かぬ狐の社。

開けはなたれた本堂から覗く生首が、じぃっとそれを見つめているようだった。

終章（後書き）

男と少女が去った後
ころりと鞠のように転がっているそれの近くを、楽しくて仕方ないというように飛び跳ねる影が在った。
その童が跳ねると共にぴちゃぴちゃと紅い液体が周りをさらに染めていく。

『嗚呼、愉快愉快』

子供のように幼く、しかし老成しているかのような響きを持つそれは、久しぶりに本当に愉快げな声である。

その声は、やがて手鞠唄でも唄う様に興奮を増していく。

『迷うよ迷う、迷うたら出られない』

そうして、あたりには楽しげな童の嗤い声が響いた。

壱

「ひぃぃ、おぉ助けくださいぃぃ」

そう言いながら、鈴から遠ざかる町人風の男。
綺麗に髷を結い、着物も小奇麗なすっきりとした顔立ちの若い男だが、柳の木下にいる鈴を見るなり腰を抜かしてしまった。
怯えながらも立てないのか、ズルズルと腰を引きずって着物が汚れるのも気にせずに這いつくばっている。

そのあまりの怯えっぷりに逆に鈴の方が泣きそうだ。

しかし、怯える男には悪いが鈴とて好きでこんなことをしているはずも無く、さっさと任務を終了させて貰うべく気合をこめて男に声をかけた。

「嗚呼、なぉたださま?」

この一言を言い放つと同時に、男はかくんと動かなくなってしまった。

「・・・」

鈴は、しゃがみこんで男の貌を覗き込んで見てみる。
そこには、もはや見事としか言えない気絶っぷりをさらす男の貌が在った。

白目を剥き、意識を飛ばし、失禁してしまうような恐怖が男には在ったのだ。

いくらなんでもこの怯えようは無いだろうと思いつつも、何がそんなに怖かったのだろうと、鈴は思わず近くにある川に貌を写した。

穏やかな川面には何の変哲も無い鈴の顔が映っている。

そこには男が怯えるようなことは何も無い。

ただ一つ、もしも怯えることがあるのなら、鈴の格好にあるのだろう。

紅く美しく、花喰い鳥が飛ぶ着物だ。

乱れた頭には煌びやかな玉簪が垂れ下がっている。

おまけに全身水浸しだ。

まるで、すぐそこの川からそのまま上がってきたようなそんな格好。

この男にはあの女の人が自分を呼びに来たとしか思えないことであろう。

鈴の脳裏に残る、紅い着物の白すぎる貌の美しい人。

川面に広がる紅い花。

記憶に残る残酷なほど美しい女の姿に身震いした。

川に写る紅い夕日が一層赤く不吉なイロに見え、鈴は眉をひそめる。

「なおーたーだ様ー何処にいらっしゃいますかー」

大きく響く、野太い声。

鈴は、瞬時に貌を上げて回りを見回た。
相変わらずまわりに人影は無いが、男を捜しているだろう者がすぐ近くに迫っていることは変わりない。

白目を剥いて倒れる男と、そのすぐ隣で川を覗きこんでいる怪しい少女。
見られれば用心棒あたりに切られるであろう、この状況。

鈴も馬鹿ではない、すぐさまあの男の用意した逃走経路を頭に思い浮かべる。

あたりに人が一人もいないことと、光の加減で貌が判別しにくい黄昏時なことに心底感謝しながら、鈴はそのままどぶんと川に入りその場を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0832z/

江戸小悪党記

2011年12月6日23時49分発行